



SIGNIS JAPAN ニュースレター

タリタ・クム！ 起きなさい！

発行：SIGNIS JAPAN (カトリックメディア協議会)
 代表：土屋 至
 発行所：〒107-0052 東京都港区赤坂 8-12-42
 聖パウロ女子修道会内
 TEL 03-3479-3941 E-mail : info@signis-japan.org
 http://signis-japan/org/

主のご復活、おめでとうございます！

主のご復活おめでとうございます。緑が生い茂りのちが豊かに満ち溢れる季節が訪れました。WBCでの日本の優勝など嬉しいニュースがある一方で、未だにウクライナでの戦争は終わりが見えません。また東日本大震災から12年が経過した今でも傷は癒えません。

不安や痛みや悲しみの尽きない試練や困難や混乱に満ちた社会の中にあっても、どうか主に感謝して日々を過ごせますように。あなたが死を越えて、今こうして私たちと共にいる喜びを深く味わえますように。そして終わることのない永遠のいのちを、私たちに教えてください。



第47回 日本カトリック映画賞決定！

『桜色の風が咲く』 松本准平 監督 / 2022年作品

今年のカトリック映画賞は 松本准平監督の『桜色の風が咲く』となりました。

世界で初めて盲ろう者の大学教授となった東京大学先端科学技術研究センター教授福島智さんと母令子さんの実話を基に描いた人間ドラマです。

幼少時、だんだん視力が失われていく智、目が見えるうちに海を見せてあげたいと家族で行く海。視力のあるうちに家族の顔を胸に刻もうと智が父、母、ふたりの兄をひとりずつ見上げていくシーンに涙がこぼれます。家族の愛情に包まれて天真爛漫に育つ智。東京の盲学校で自立した高校生活を送りますが、18歳のときに聴力も失ってしまいます。視力、聴力を失うこと、暗闇と無音の世界に落ちる恐怖、孤独にさいなまれる智。そんな苦悩、葛藤の中、希望を与えたのは 母が考案した新しいコミュニケーション手段「指点字」でした。初めて指点字を母の指が智の手に打つシーンにまた涙がこぼれます。

この指点字をきっかけに智の困難を乗り越えようと生きる力、気迫に満ちた迫真の姿に心から感銘を受けます。智の友人の「思索は君のためにある」という言葉通り、この境遇になった自分しかできないことを「する」という、通常では考えられない試練を逆転の発想で難関を突破する姿に心揺さぶられます。1月に行われたカトリック映画賞選考上映会、話し合いでは満場一致で選ばれました。是非多くの方と感動を共有したい素晴らしい作品です。

3年間コロナ禍で授賞作品の上映会をすることができませんでした。今年は例年のような規模ではありませんが、皆様とこの映画のすばらしさを分かち合う上映会を企画しています。授賞式、上映のあとは 松本准平監督と顧問司祭晴佐久神父との対談も予定しています。詳細については、決まり次第シグニス HP にて掲載いたしますのでお待ちください。(映画チーム 増田) ★映画公式サイト <https://gaga.ne.jp/sakurairo/>



<授賞理由 シグニスジャパン顧問司祭 晴佐久昌英>

映画は光と音でつくられている。したがって、その両方を失った人物を主人公にした作品を作ることは、映画作家にとっては究極のチャレンジになるはずだ。光と音のない世界を生きる人間の真実を光と音を用いて表現するとはどういうことなのか。

松本准平監督はこれまでも、もっとも困難な状況にある人間を描いてきた。そこにはなおも救いがあり、映画はその救いを語りうると信じているからだ。その監督が今回、目に見えない光を撮ってくれたことに感謝したい。

体の苦痛も心の苦痛も、誰かとつながっていれば耐えられる。であれば、だれともつながれない孤独こそは、最大の苦痛であろう。現代人が抱える苦悩の本質は、そこにある。目が見えていても、耳が聞こえていても、誰ともつながっていないという孤独。しかし見よ、闇と無音の虚空に放り出された者に、母の手が触れてくる。指でことばを伝えてくる。人間にとって最も大切なもの、すなわちぬくもりのあることばを肌で聞くという、信じがたく美しい瞬間！実はそれは、映画そのものの美しさと深い関わりがある。観客もまた、映画館の暗闇の中に孤独で座っているのだから。

いつだって救いは、向こうからくる。神の愛の現れであるキリストが自らを『神の指』になぞられたように、愛するわが子に触れる母の指はそのまま神の指なのだ。この映画自体もまた、絶望の世紀を生きる多くの人の心に直接触れてくることだろう。「映画は人を救えるか」という監督自身の祈りにも似た問いに、日本カトリック映画賞をもって答えたいと思う。

第2回 シグニス平和賞

『劇場版 荒野に希望の灯をともし』 谷津賢二監督 / 2022年作品

映画『劇場版 荒野に希望の灯をともし』が第2回シグニス平和賞に選ばれました。医師・中村哲さんの現地活動 35 年の軌跡を追ったドキュメンタリー作品です。アフガニスタン、パキスタンの戦乱の中、病や貧困に苦しむ人々に寄り添い続けた中村哲さん。彼はなぜ医者でありながら、井戸を掘り、用水路を建設したのか？何を考え、何を目指したのか？真の平和とは？それらを観る人に静かに問いかける優れた作品として選考会でも高く評価されました。

シグニス平和賞は、平和へのメッセージとなりうる作品を選んで贈られるもので、今回 2 回目を迎えます。(第 1 回シグニス平和賞授賞作品は『石川文洋を旅する』2014 年 大宮浩一監督) 上映会・授賞式の日程は現在調整中、決まり次第シグニス HP にて掲載いたします。

(映画チーム 鈴木)



★映画公式サイト <http://kouya.ndn-news.co.jp/>

<選評 晴佐久昌英神父>

貧困と飢餓、戦争、環境問題。地球上の諸問題について、多くの人はすでにあきらめている。最大の問題は、そのあきらめ自体であることに気づかずに。そんな世界に、中村哲という「あきらめない人」が確かに存在したという事実は、全人類の希望である。中村哲の遺言のようなこの映画に「日本カトリック映画賞・シグニス平和賞」を授与し、特に道を求める若者たちに荒野へ向かう勇気を贈りたい。

インターネットセミナー2023のご案内

テーマ「オンラインで信仰を育む」

シグニスジャパンが積み重ねてきた『教会とインターネット』セミナー —インターネットが拓く新・福音宣教—第 27 回の今年は、「オンラインで信仰を育む」とテーマに掲げています。

インターネットメディアが登場して以来、福音宣教と信仰教育という教会の根幹的な活動がホームページを中心に展開されています。近年はさらに動画、SNS を通じての取り組みが多彩になり、コロナ禍を通じてさらに促進されています。実際に集えない状況、リアルに出会えない場合でも、ネット上で新たな出会いや交流が生まれ、信仰を伝える新たな場になりつつあります。そのような状況と可能性、さらに課題について考えてみたいと思います。

今回は、講師として、教会学校のオンライン配信をしている片岡義博師(名古屋教区)と SNS フォロワーを多数お持ちの片柳弘史師(イエズス会)にリモート参加でお話をさせていただき、オンラインセミナーの形をとります。信仰共同体が教会の建物から飛び出しつつあるといえる今日、教会や信仰との出会いの広がりに貢献しているお二人に、その体験を通じてお話をいただきます。

さらに、前号で紹介した、シグニスの仲間により昨年開設されたオンライン信仰入門講座「ピステイスの庭へようこそ」(<http://pistis-garden.net/el/>) について、主企画者である土屋至氏(シグニスジャパン会長)より実演を含めて概要が紹介されます。

ネット上で育まれた信仰は教会に定着するのだろうか、この新しい出会い方により福音宣教は本当に広がり得るのかなどを、ご一緒に考えていきたいと思えます。このテーマにご関心をお持ちの方はぜひご参加ください。

《実施要項》

日時：2023 年 4 月 22 日(土) 14:00~17:00
13:30 Zoom 入場開始
14:00 開会の祈り・会長挨拶・SIGNIS 紹介
14:20 プレゼンテーション 1 片岡義博師
15:00 プレゼンテーション 2 片柳弘史師
15:50 プレゼンテーション 3 土屋至氏
「ピステイスの庭へようこそ」紹介
16:50 閉会の祈り
(※途中で休憩や質疑応答などを挟みます)

なお、当日参加できない場合でも、参加費をもってお申し込みいただいた方には、録画アーカイブ視聴のためのリンク URL をお送りしますので、多くの方のお申込みをお待ちします。(インターネットチーム 石井)

主催:SIGNIS JAPAN (カトリックメディア協議会)

後援:サンパウロ/女子パウロ会

問い合わせ先:

セミナー内容 高原夏希 signisjp.internet@gmail.com

お支払い 清水京子 info@signis-japan.org



チラシ PDF

[お申込みはこちらをクリック](#)

または、左の QR コードから

賛助会員と共にささげるミサ

3月11日(土)カトリック浅草教会にて賛助会員と共にささげる感謝ミサが捧げられました。

2020年はコロナで中止、2021年11月の感謝ミサは、おそろおそろご招待状をお送りしたのですが、やはりまだコロナへの警戒が強く残っていた為か、出席された賛助会員の方はおふたりのみ、2022年も11月に計画し、いざ実施の前日の晩にシグニス側の事由で急遽中止となり、今回同内容でようやく実施に漕ぎ着けました。

賛助会員の方々のご出席はご同伴のお友だちの方ほかを含めて8名、晴佐久神父を含めてシグニスジャパンメンバー12名の合計20名、当日は3月初旬にしては春のような暖かさ、久しぶりの懐かしさでの再会を楽しみました。

晴佐久神父の司式で、東日本大震災で亡くなられた方々への追悼の祈りでミサが始まり、ミサ後はホールに椅子を円形に並べて最初に晴佐久神父のお話にも耳を傾けました。—心を病んでいる青年とのLINEのやりとりを通してだんだん心が通い合っていく過程、その時の晴佐久神父の気を揉む気持ち、ちょうど恋愛と同じ。今度“初デート”する。少しずつ近づいて祈りつつ、何でも言える信頼関係を築き上げていく。それを“ラポール”といい、お互いに安心して自己開示し相手を受け止める。その通路が通じると聖霊が働ける。信頼関係なしでは何もできない。信頼関係があれば神の国のネットワークに組み入れて貰える。今から楽しみ。キリスト者ならそうあるべき。一番いいのは一緒にご飯を食べること。そこからラポール形成がはじまる。神様によって信頼関係を作って貰える。—

晴佐久神父のお話のあとは今回の参加者みなさんと、シグニスメンバーから日頃の想いと簡単な自己紹介をお願いした。以下にご紹介します。

<参加者の方からのひとこと>

*元シグニスメンバー。外野にでるとシグニスが何をやっているところか全然伝わってこない。シグニスが身近な存在でない。今は自分なりに何か伝えたいと思って自分なりに動けることをしている。自分自身は充実している。

*シグニスの上映会を観に行っただけがきっかけで賛助会員になった。初めて感謝ミサに参加した。

*近所に住んでいたのと従姉妹に誘われた。新しい風を吹き込んで貰いたいのて来た。皆さまの話に今日はよい機会を与えていただいてよかった。

*シグニスの上映会で「あん」を観て賛助会員になった。シグニスの方にも協力的に何かやれればと思っているのでよろしく。

*晴佐久神父様に洗礼を授けていただいた。神父様の話に惹きつけられる。何か自分でできることはないか。今日はエネルギーをいただいた。

*皆さんの話を参考にしたいと参加した。神父さまのとっても素晴らしいお話、まだお付き合いをお願いします。

*韓国が好きで世界大会ソウルの日本側準備に協力。カトリック学校教諭。コロナで色々なことを失った。黙食が長かったので、もう喋っていいよと言うと1テーブルに中1から高3各1学年と一緒に食事するので、上級生がどう話してよいか分からなくて困っていた。教皇様の回勅をカレンダーにすることで分かち合いができて良かった。

*教会でインターネットのホームページを担当。縄文土器に熱中している。一緒にご飯を食べるのもいいけど、触れたり触ったりも大事。市の考古学研究会に入った。実際に土器に触れ、土器を洗うのがいい。ハマっている。地元の人々の声も聞く。土器の世界もある。五感が大事。

<晴佐久神父の締めのお祈りの前のひとこと>

小さな集まりですが大きな働きをしている。取り込まれたという発言がかなりあったが、それは事実。神様がみなさんを取り込んだのだから、逆らいようがない。志願兵ではなく召集兵。神が召した以上は、責任者は神。必要なこと、必要なところ、必要なものは神が与えてくれる。「神のランタン」となって輝こう。

(注)「神のランタン」とは、カトリック浅草教会報に掲載された晴佐久神父の巻頭言にある、一人の受洗希望の方の文章「私は、神の愛の炎を宿した、神のランタンになりたい」から。

シグニスのメンバーからは、会員になった経緯などが紹介されました。「何となく引き込まれた」という話が多くありました。不思議なことですが、そうして共に時間を過ごしているうちに、今のシグニスジャパンが形づくられてきたように思います。

現在私たちは、賛助会員の名前を「サポーター」に変えることを検討し、多くの方がいろいろな場面でシグニスに関わってくださることを願い、その形を模索しています。これからもどうぞよろしく願いいたします！

(事務局 町田)

